13. 大動脈解離の中枢側断端形成の為のフェルトストリップにより大動脈の狭窄を生じた1例

松浦　馨，中嶋博之，新妻ゆり子
（国立循環器病）

49歳の男性，急性A型大動脈解離術後，高熱と貧血の持続を認めた。収縮期雑音が聴取され画像上大動脈の狭窄を認めた為，大動脈吻合部狭窄の疑いで手術となった。断端形成に用いられた内側のフェルトストリップがややめくれ，硬化しており，狭窄の原因となっていた。感染の所見は認めなかった。術後経過は順調で溶血性貧血及び炎症性変化も消失し，画像上も狭窄は解除された。断端形成についての考察を加え報告する。

14. 乳頭部出血により繰り返し膵炎を併発したRendu-Osler-Weber病の1手術例

酒井　望，浅倉博幸，土田智一
吉留博之　（千大）

症例は68歳女性。幼少時より鼻出血認められ昭和62年貧血精査時にRendu-Osler-Weber病と診断された。平成8年腹痛出現し乳頭部出血による膵炎の診断，平成13年より膵炎症状頻回となった。家族歴で母，姪に鼻出血傾向認めた。内科的治療として内視鏡的括約筋切開術，コイル塞栓術，ステント挿入試みたが奏効せず，経十二指腸的乳頭切除術施行。術後，出血，膵炎症状認められず外科的治療が有効と考えられた。

15. 小腸gastrointestinal stromal tumorの異時性肝転移に対し肝切除を施行した1例

河野宏彦，西谷　慶，西村真樹
岩田剛和，漆原　徹，横山孝一
（県西総合）

症例は77歳，女性。平成12年12月小腸腫瘍にて小腸合併腫瘍切除術を施行，病理診断は小腸GISTであった。経過観察中，肝S4・S8に肝転移が指摘され，平成13年8月7日，肝内側区域切除・肝S8亜区域切除及び肝動脈カニュレーションを施行した。現在，外来にてEpirubicinによる肝動注療法を施行している。小腸GIST肝転移に対しては，切除可能であれば肝切除を行うことが望ましいと考えられた。

16. 急性胆嚢炎に対するPTGBD後の腹腔鏡下胆摘症例の検討

岩田英之，渡辺茂樹
セレスタ・ラマドーザー
宇田川郁夫，水谷正彦，菊地紀夫
（八日市場市民総合）

急性胆嚢炎に対しPTGBD施行後，腹腔鏡下胆摘術（以下LC）を施行した症例につき検討した。対象は当院にて1996年9月より2001年9月までにPTGBD施行後LCを施行した急性胆嚢炎症例（33例），PTGBD施行せずLC施行した急性胆嚢炎症例（9例），同時期に胆石症にてLC施行した症例（94例）と比較検討した。術中・術後合併症，手術時間，術後入院期間について大きな差は認めず，術前PTGBD施行は有用であると考えられた。

17. 特異な経過を辿った胆石イレウスの1治験例

太田　舞，塩原正之，安藤克彦
布村正夫，更科廣實（千葉市立）

症例は腹痛を主訴とした69歳の男性。胃切除・B-Ⅱ再建術，胆摘・総胆管切石術の既往があった。CT，エコー像，イレウス症状より胆石イレウスと判断し，小腸切開結石摘除術を施行した。術後も熱発，腹痛，炎症所見が持続した。CTにて後腹膜膿瘍を認め，十二指腸の損傷が原因と考えられた。胆摘後・消化管再建後の胆石イレウスは非常に稀であるが，十二指腸穿孔や損傷による膿瘍形成を合併することがあり，留意が必要である。

18. 当院における腹腔鏡下手術による合併症の検討

釜田茂幸，諏訪敏一，中川宏治
杉浦敏之　（大宮赤十字）

1994年1月から2000年12月まで当院における腹腔鏡下手術275例について検討した。胆道疾患256例，脾疾患7例，その他12例であった。胆のう摘出術での開腹手術移行症例は23例（9.0%）で胆管損傷などの重篤な合併症は3例（1.2%）に認めた。その他の腹腔鏡下手術では腸管損傷などの合併症は2例（10.5%）であった。合併症例の検討から，術前画像診断による解剖学的異常の把握と慎重な手術操作が必要であると考えた。